

目の前が黄金に埋め尽くされて、伸ばした手すら見ることも叶わず、溺れた！　かと思いきや、

ふよよう、と、金色の海から、浮かび上がって参ります。

顔を出せば、いきなり見えてくる、大きなエメラルドグリーンの方。

飴細工の船に拾われて、

ゆうら、ゆうら、たゆたい、たゆたい、

アリの死骸とヘマタイトの石で構成された

真っ黒な砂浜に降り立ちました。

私はそれら全て踏みつけにして、

ずんずん歩いて行きますと、

私の通った道が、真っ赤な血の跡になって、

思わず、走り出しました。

細い腕と白い袖が、視界の端にちらちら見えて、

だんだんと、足の裏が冷たく感じてきました。

森の中は、たくさんの目が覗いていました。

枝にとまった、一つ目鳩の目です。

ぼんやり光って、でも、すべて鋭くこちらを見えています。

蜘蛛の巣が木末から木末に繋がっている、

等間隔に置かれた、灰色に古ぼけた木が

前から現れては消え、現れては後ろに消えて行きます。

灰色の土の下は、凍った地下水がときどき露出して、ダイヤモンドの集団墓地です。

私は滑らぬよう慎重に、

ゆらゆら歩いて行きますと、

私の通った道が溶けだして、森の木が緩んだ地面に崩れて吸い込まれて、思わず、また走り出しました。

手首に、なにか擦れた跡があつて

ああ、帰りたい。と強く思いました。

裸足のまま歩くのが痛くって、見ると、やっぱり足首にも同じ跡がありました。

冷たいこんくりいとに、濡れた足跡。白光りしたのっぴな電柱、まんまるな電灯。

辿り着いたのは大きな建造物の白い壁。

そこに空いている、ガラス張りの穴ぼこを見つけて、なかに入ると、

白い白いベッドがありました。

私の檻がありました。

消灯の時間はすっかり過ぎていて、

病室はしんと寝静まり返っておりました。

はっとして窓を見ましたが、

窓の外には、海が見当たりませんでした。

どうしても、見当たりませんでした。

覚えていたのは夢の帰り道だけでした。

ほんとうの帰り道は、覚えていないのに。

ほろり、と透明な涙が流れました。